



日本植物分類学会 ニュースレター

No. 66

Aug. 2017

今号のトピックス

本年度の野外研修会（9/15～9/17 三重県菅島にて）の追加募集があります。→ 4 ページ

本年度の講演会は 12/16 です。→ 5 ページ

目 次

諸報告

植物地理・分類学会からの要望について 2

2017 年度第 2 回メール評議員会議事抄録 4

お知らせ

2017 年度日本植物分類学会野外研修会のお知らせ（追加募集）... 4

2017 年度日本植物分類学会講演会のお知らせ 5

第 17 回（2018 年度）日本植物分類学会賞（学会賞および奨励賞）
の受賞候補者の募集 6

第 18 回（2019 年度）大会開催地の募集 6

庶務からのお願い 7

書評 7

会員消息 8

諸報告

植物地理・分類学会からの要望について

会長 伊藤 元己

2017年5月27日(土)に開催された植物地理・分類学会の総会にて、同会員の日本植物分類学会への合流を行うことで、2018年3月31日をもって発展的に植物地理・分類学会を解消するという決議がなされました。これにより、これまで仮定の話として検討してきた植物地理・分類学会執行部からの要望について、本学会としての意思決定を行う前提が整ったこととなります。

ニュースレター65号にて、植物地理・分類学会執行部からの要望を説明しましたが、当学会で検討が必要なことが2点ありました。1つは、合流時に植物地理・分類学会のみに所属している会員を、できるだけ円滑に日本植物分類学会会員へと移行させる方策を考えてほしいということ、もう1つは、植物地理・分類学会で発行している『植物地理・分類研究』(旧『北陸の植物』)の雑誌名を存続できないかということでした。本学会会員にこの件についてのご意見をお願いしたところ、1件のご意見をいただきました。それは、20年ほど前に行った3学会合同英文誌発行検討委員会(注)で、植物地理・分類学会が独自性を保ちたいという理由で3学会の合同誌が否定され『植物地理・分類研究』が存続されたにもかかわらず、今更『植物地理・分類研究』という名称を和文誌として継続して欲しいという要望は受け入れ難い、というものでした。私も当時、(旧)日本植物分類学会の委員として検討会に参加していたので、このようなお気持ちも十分に理解できます。しかしながら、日本の植物分類学の発展にとってどのようにするのが良いかという観点からの検討も必要だと思います。

植物地理・分類学会からの要望につきましては、2回にわたる両学会執行部間での話し合いで要点の整理を行った後、2017年3月に開催された編集委員会および評議員会にて検討を行っています。その第一点として、植物地理・分類学会会員が日本植物分類学会に合流しやすくするための措置として、現在、植物地理・分類学会のみに所属する会員が、日本植物分類学会の会員になる場合は2018年度の会費のみ5,000円(通常の一般会員は7,000円)にするという案です。これに関して、会員増加は本学会にとっても利益があるということ、植物地理・分類学会からの移行会員の会員資格は4月から始まる(通常会員は1月から)ということもあり、特別措置を講じることへの賛成が多数でした。なお、日本植物分類学会の1月から3月に発行される出版物は、4月から合流会員には遡って配布いたしません。

第二点の和文誌の名称に関しては評議員会でも各評議員から様々な意見が出されました。歴史のある『植物地理・分類研究』を受け継ぐのが好ましいという意見から、『分類』という和文誌があるのに、なぜ本学会とは直接関係のない雑誌である『植物地理・分類研究』の名前を使用する必要があるのかという意見までありました。それぞれの方の雑誌に対する思い入れなどもあり、難しい課題であります。そのため、12月下旬に、もし統合した場合の技術的なことを話し合うために日本植物分類学会編集委員長、同和文誌編集委員長、同J-stage担当、植物地理・分類学会編集委員長が集まり検討しました。さらに、3月に行われた編集委員会議では、将来的な和文誌の方向性について議論を行い、以下のような検討結果が出されて評議員会に報告されています。

16年前に成し得なかった日本の植物分類学関係の3学会統合が、16年の歳月を経て進みそうであったので、これを機に和文誌を1つとし、日本を代表するより一層充実した和文誌を作る、そして日本を代表する和文誌なので、所属学会にこだわらず、アマチュアの方々がより馴染み深く、日本国内の植物分類学の歴史とできるだけ長く関わってきた名前を選びたい、また植物地理・分類学会の会員の方々に、今後より深く植物に関わっていただくことによって、日本の植物分類学の発展につなげたい、などの理由から、雑誌名を『植物地理・分類研究』とし、『北陸の植物』から続く伝統を受け継ぎたいと考え、巻号も引継ぐことが最善であるという結論になりました。これは、『北陸の植物』から『植物地理・分類研究』へと続けられた、植物分類学分野の出版活動という過去の日本の植物分類学の歴史・伝統を日本植物

分類学会で引き継いでいくことを意味します。

この報告を受けた2017年3月の評議員会では、前述のように編集委員会の結論について賛成であるという意見から、現在の和文誌『分類』を継続すべきであるという意見までさまざまな意見が出され、時間をかけて議論を行いました。その結果の総合的な意見としては、長い歴史をもつ雑誌の名前を残すことの意義は、原記載や学名変更の論文を引用しなければならない分類学では特に大きく、64巻続いてきた『植物地理・分類研究』の果たして来た役割は尊重するべきである、という方向となりました。しかし、この時点では、5月に予定されていた植物地理・分類学会の総会前であり、学会が存続するかどうかについての決議が行われていないため、本学会の評議員会としての決定を行うことは保留し、本学会の総会での紹介に留めました。

本件については、植物地理・分類学会の総会での決議を受けまして、2017年7月21日～2017年8月9日に2017年度第2回メール評議員会開催して議論と評議員会としての決定をお願いしました。そして、ここに述べたような経緯と理由をご説明しましたところ、本ニュースレターに掲載されている第2回メール評議員会抄録のとおり、全会一致でご承認をいただきました。なお和文誌においては、少なくとも1年間は『分類』は廃刊ではなく統合である旨を『植物地理・分類研究』に示していきたいと考えております。また、『分類』が主導権をもった統合であることをはっきりさせるため、統合後の和文誌編集委員長には鈴木浩司氏に続投して頂き、山田敏弘氏には和文誌副編集委員長として鈴木さんをサポートしていただくことを考えております。

総会で会員から出た雑誌の性格について、『植物地理・分類研究』は、分類学会とはジャンルが違うことがあり、群落生態学や生態学なども掲載してきたことから、引き継ぐ場合は性格性について検討してほしい、という意見がありました。『植物地理・分類研究』では近年、群落生態学や植生学分野の論文投稿がほとんどないこと、また、群落生態学、植生学などは植物分類学を基盤としてもつ学問分野であること、さらに、植物分類学自体も植物（あるいは時には生物間相互作用をもつ細菌から動物までも含む）の多様性に関する幅広い学問分野へと変貌しつつあることなどを考えると、『植物地理・分類研究』が扱ってきた分野はそれほど『分類』とは差異はないと思います。実際、旧『植物分類、地理』には、植生学の論文も掲載されていました。

今回の評議員会の決定について、日本の植物分類学のさらなる発展に向けた結論として前向きに捉えていただき、会員の皆様方にもご理解を賜りますようお願い申し上げます。

注：3学会合同英文誌発行検討委員会

現日本植物分類学会が創設される前に、(旧)日本植物分類学会、植物分類地理学会、植物地理・分類学会の3学会で、英文誌を共同で発行する可能性を検討した委員会である。1996年に「植物分類学関連学会連絡会」が結成され、合同会員名簿の発行、シンポジウムの開催などをすすめるともに、植物分類学の分野での国際的な雑誌(英文誌)を共同編集する可能性なども探るために、会合同英文誌発行検討委員会が作られた。但し、連絡会に参加していた種生物学会は参加せず、残りの3学会で進められた。

当時、植物分類地理学会は英和文混交の『植物分類、地理』、植物地理・分類学会は英和文混交の『植物地理・分類研究』を出版、日本植物分類学会は英語論文を掲載できる学術雑誌を出版していなかった。そのため、植物分類学関連の純粋な国際英文誌を出版すべく委員会で検討を行った。しかし、植物地理・分類学会が途中で、英文も掲載できる『植物地理・分類研究』の発刊を継続するというので検討委員会から抜けたため、検討委員会は解散となった。しかし、この検討委員会での議論を契機として、(旧)日本植物分類学会と植物分類地理学会は英文誌を共同で出版することのみならず学会の統合まで進み、2001年に現在の日本植物分類学会が誕生した。そして『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica (APG)』を植物分類地理学会から誌名・巻数とともに引き継いで英文誌として位置付け、和文論文を掲載するために和文誌『分類：BUNRUI』を創刊した。

2017 年度第 2 回メール評議員会議事抄録

庶務幹事 田中 伸幸

2017 年 7 月 21 日～2017 年 8 月 9 日に 2017 年度第 2 回メール評議員会が開催されましたので、議事抄録を報告します。2017 年 5 月下旬に植物地理・分類学会総会において、植物地理・分類学会の日本植物分類学会への合流の決議がなされました。この会議は、その決議を受けて、当学会として植物地理・分類学会からの要望について、改めて評議員の皆様へ審議をしていただくために開催されました。議事抄録は以下の通りです。

なお、この議案の提案に至った経緯や詳細につきましては、伊藤元己会長からの学会合流に関するご報告をご参照ください。

開催日時：2017 年 7 月 21 日～2017 年 8 月 9 日

開催方法：電子メール等の媒体を用いた会議

参加者：評議員全員

議長選出

慣例にしたがい伊藤元己会長を議長とすることに反対はなかった。

審議事項

【第 1 号議案】平成 29 年度に日本植物分類学会の会員でない植物地理・分類学会の会員について、平成 30 年 4 月から日本植物分類学会に入会する場合、初年度会費は 5,000 円とする。

【第 2 号議案】日本植物分類学会の和文誌『分類』と植物地理・分類学会誌『植物地理・分類研究』を統合し、継続誌名を『植物地理・分類研究』とする。

審議結果

第 1 号議案については、審議の結果、「ただし、1 月～3 月までに日本植物分類学会で発行する雑誌等出版物は遡っては提供しない。」という条件を明記する修正を経た後、承認多数で可決された。第 2 号議案については、提案通り承認され、修正はなかった。また、委任状はなかった。

第 1 号議案 【賛成 13 票、反対 0 票、白票 0 票】

第 2 号議案 【賛成 13 票、反対 0 票、白票 0 票】

議事録署名人として村上哲明氏と岡崎純子氏が選出された。

お知らせ

2017 年度日本植物分類学会野外研修会のお知らせ（追加募集）

山脇 和也（近畿植物同好会）・福田 知子（三重大学教養教育機構）

ニュースレター 5 月号で募集しました研修会ですが、7 月末現在、募集人数に幾分か余裕がありますので、追加募集をさせていただきます。

9月5日(火)まで締め切りを延長いたしますので、迷っていらっしゃる方は是非この機会にお申し込みください。研修会の詳細については5月号をご参照ください。なお、担当の福田が8月末に不在のため、下記のように申込先を野外研修会担当委員宛てに変更しております。ご注意ください。

場所：三重県菅島・答志島

日程：2017年9月15日(金)～9月17日(日)

参加費用：旅館泊2日(夕食・朝食込) + 船代他で23,000円程度。

申込先：〒599-8531 堺市中区学園町1-1
大阪府立大学大学院理学系研究科 西野 貴子 宛
電子メール：nishino@b.s.osakafu-u.ac.jp
Tel. 072-254-9754 Fax. 072-254-9932

締切：9月5日(火)

お申し込みの際には、氏名、住所、電話番号、メールアドレスをお知らせください。3日以内に返事がない場合には、お手数ですが、再度、お問い合わせをお願いいたします。

2017年度日本植物分類学会講演会のお知らせ

講演会担当委員 布施 静香

2017年度の日本植物分類学会講演会は、大阪学院大学の林一彦先生に会場をお世話いただき、次のとおり開催いたします。演題など詳細につきましては次号のニュースレターでご案内いたします。

【日時】2017年12月16日(土) 午前10時～午後4時50分

【講演会場】大阪学院大学 2号館地下1階2号教室(02-B1-02教室)
〒564-8511 大阪府吹田市岸辺南2丁目36番1号(電話：06-6381-8434)

【講演スケジュール】

- 10:00-10:05 ご挨拶 伊藤 元己(会長)
- 10:05-11:05 永益 英敏(京都大学)
- 11:10-12:10 綿野 泰行(千葉大学)
- (12:10-13:25 昼食)
- 13:25-14:25 木下 栄一郎(金沢大学)
- 14:30-15:30 邑田 仁(東京大学)
- 15:40-16:40 角野 康郎(神戸大学)
- 16:45-16:50 ご挨拶 林 一彦

第 17 回 (2018 年度) 日本植物分類学会賞 (学会賞および奨励賞) の受賞候補者の募集

日本植物分類学会会長 伊藤 元己
学会賞選考委員会委員長 永益 英敏

日本植物分類学会賞 (学会賞および奨励賞) の受賞候補者を募集します。学会賞・奨励賞ともに、会員の皆様からの積極的な自薦による応募を期待します。他薦についても、ふるってご推薦ください。これまでの受賞者名等については学会ホームページでご覧になれます。候補者は学会賞選考規定第 2 条に基づき、以下に該当する方です。

「日本植物分類学会賞」: 植物分類学および日本植物分類学会の発展に特に顕著な貢献が認められた方に授与いたします。受賞者の資格は 10 年以上継続して本会会員である方です。

「日本植物分類学会奨励賞」: 平成 30 年 4 月 1 日において満 38 歳以下で、優れた研究業績をあげた将来有望な若手研究者 (学生を含む) に授与いたします。受賞者の資格は 3 年以上連続して本会会員であり、主要な研究業績の一部を本会の大会または雑誌に発表している方です。

応募要領: 自薦の場合は、(1) どちらの賞への応募か、(2) ご自分の研究全体を示すタイトル、(3) 略歴 (生年月日、学歴、職歴など)、(4) 調査・業績の概要、そして (5) 業績リスト (論文、著書など) と本学会の大会での発表記録を、MSWord や一太郎等の電子ファイル、あるいは A4 用紙に記入してお送りください。書式は自由です。他薦の場合は、(1) 候補者の氏名、(2) どちらの賞への応募か、(3) 研究全体を示すタイトル、(4) 略歴、(5) 推薦理由をお知らせください。

自薦、他薦を問わず、さらに必要な資料があれば学会賞選考委員会から候補者の方に提出を依頼します。応募は e-mail でのファイル添付または郵便でお願いします。

書類送付先: 〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学総合博物館 永益英敏
e-mail: nagamasu.hidetoshi.2w アットマーク kyoto-u.ac.jp (カタカナを @ に変えてください)

応募締切日: 平成 29 年 9 月 25 日 (月)

両賞の受賞者は、平成 30 年 3 月の日本植物分類学会第 17 回大会 (金沢) において表彰されます。また、同大会において受賞講演を行っていただき、和文誌『分類』に受賞記念論文を発表していただくことを原則としております。

第 18 回 (2019 年度) 大会開催地の募集

庶務幹事 田中 伸幸

日本植物分類学会第 18 回大会 (2019 年) の開催地を募集いたします。毎年 1 回春季に開催されます。第 16 回大会は 2017 年 3 月 9 日～12 日に京都市で開催されました。第 17 回大会は 2018 年 3 月 7 日～10 日に金沢市で開催されます。

大会開催にあたっては、講演会場 (約 150 名収容可能なもの)、クローク、本部、休憩室、ポスター発表会場等のスペースの確保が必要となります。また、大会中に評議員会等の会議室をお借りすることになります。大会前の準備としては、大会案内と大会申込書の作成、プログラム編成、要旨集の編集・発行、懇親会会場の選定などがあります。大会運営は学会からの補助金 (10 万円) と参加費で行って

いただきます。大会をお引き受け下さる（あるいは場合によっては引き受けても良い）という会員の方は、2017年10月30日までに庶務幹事（下記）宛にご連絡をお願いいたします。ご参考までに、これまでの大会開催地は学会ホームページ（<http://www.e-jsps.com/wiki/wiki.cgi>）でご覧になることができます。

連絡先：〒305-0005 茨城県つくば市天久保 4-1-1
 国立科学博物館 植物研究部内
 日本植物分類学会事務局（庶務幹事 田中伸幸）
 電話：029-853-8979 Fax：029-853-8998
 e-mail: nobuyuki_tanaka@kahaku.go.jp

庶務からのお願い

庶務幹事 田中 伸幸

最近、会員の皆様へ発送した当学会のニュースレター等の出版物が、宛先不明として、事務局へ返送されてくるケースが増えております。転送には費用もかかりますので、ご住所、ご所属の変更があった会員におかれましては、すみやかに会計幹事宛にご連絡いただきますようお願い申し上げます。変更の連絡先は以下になります。皆様のご協力をお願い申し上げます。

住所・所属変更の連絡先：〒710-0046 岡山県倉敷市中央 2-20-1
 岡山大学 資源植物科学研究所
 日本植物分類学会 池田 啓（会計幹事）
 Phone: 086-434-1238, Fax: 086-434-1249
 e-mail: ike@okayama-u.ac.jp

書評

湿原の植物誌 北海道のフィールドから

富士田 裕子 / 著 東京大学出版会 / 発行 ISBN：978-4-13-060250-1
 定価：4,752 円（本体価格：4,400 円+税） A5 判 256 ページ

あまりフィールド経験が豊富でない私だが、山の中で突如として現れる一面見渡せる湿原の景色には、登山の疲れも吹っ飛んで見とれてしまう。しかし調査においては、何度か同行した溪流沿いも大変であったが、湿原もまた大変な場所であるのは容易に想像つく。

書籍では、湿原とはなにか、湿原の分布や起源、形成過程、湿原を代表する植物であるミズバショウやハンノキなどの生態研究、そして失われつつある湿原とその再生の取り組みなどが紹介されている。かつて湿原は日本全国で広がり、とくに関東以北は、稲作が広がる前は湿地林や湿地草本群落が広がっていたようだ。しかし人間による排水、治水、開発により、北海道以外では多くが失われてしまったようだ。現在みられる湿原の起源については、最終氷期以降に成立したことがレビューされているが、はるか以前から湿原は植物の生育場所や進化において重要であったに違いない。湿原や研究紹介の合間には、湿原ならではの、北海道ならではの研究



